教育・研究から学生・卒業生の活躍まで幅広く伝える
N. NUstyle
https://www.nihon-u.ac.jp
日本大学広報
No.845
編集・発行
日本大学広報部広報課
〒102-8275 東京都千代田区九段南 4-8-24
電話：03(5275)8132 直通











NU CLOSE UP ワールド・カフェ

1年生が学部を超えた交流

全学共通教育科目「自主創造の基礎」の一環

令和8年度ワールド・カフェが6月7日、本学11会場で開催され、16学部と短期大学部の1年生約1万3500人が参加した。理工学部駿河台校舎では国際関係学部と工学部の一部教室をオンラインでつないで交流が図られた。

同カフェは全学共通教育科目「自主創造の基礎」の一環。カフェにいるようなリラックスした雰囲気でグループワークを行い、自由に意見交換しながら学びのモチベーションを高め、視野を広げるのが目的。当日は大貫進一郎学長が理工学部駿河台校舎会場を視察した。

今年度のテーマは「私たちが豊かに暮らしていくために」。学部の異なる6人の学生が一つのテーブルに着き、自己紹介の後「お金」「自由」「SNS」など、各自が考える豊かさについて書いた付箋を模造紙に貼る。リーダー役の学生は、全員が発言できるよう気を配りながら、議論を盛り上げていた。続いて他のテーブルとメンバーを入れ替えて議論を重ねた後、再び元のグループに戻り、多様な意見を踏まえてまとめを行い、最後に発表した。

大貫学長は、会場内を回りながら何人もの学生と意見を交わし、「これまで130万人もの卒業生がいて、分野を超えた出会いを生かせるのが本学の強みであり、財産でもあります。今日をきっかけに、他学部の学生との交流を広げてほしい」と話していた。

終了後には、意気投合した新しい仲間と連絡先を交換する姿があちらこちらで見られた。



異なる視点に触れ、学びに生かす

全学共通初年次教育検討ワーキンググループリーダー **米田 哲也** 理工学部教授

ワールド・カフェは、新入生が他学部の学生と交流し、本学の規模の大きさを体感するものです。平成29年度にスタートしました。

従来は「大学って、どんなところ?」がテーマでした。高校と大学の学びの違いを知り、学生生活の目標を定めるきっかけになることを重視していましたが、今年度は過去のアンケート等を参考に内容を変更。「私たちが豊かに暮らしていくために」とし、より各学部の学びに結び付くことを意図しています。

中学、高校でもこうしたグループワークを行う機会が増えていることから、年々同カフェでの議論も活発化していると感じています。異なる視点を持つ学生の意見に触れた経験は、各自が所属する学部に戻り、社会課題に向き合う際に生きてくると期待しています。

今後も学生の声をうまく取り入れながら、より良い形で開催ができるように取り組んでいきたいと思います。

理工系の学生の視点に驚く

芸術学部 **神（こう） 真琴** さん

初めて他学部の学生と意見を交わすことができて、特に理工学部や生産工学部などの人たちの視点に驚かされました。

自分にとって豊かに暮らすとは、アートに触れたり自由に表現したりするなど、感性に関わる視点が中心になっています。

理工系の学生は、SDGsや環境問題など、社会全体を捉えて現実的な意見を数多く出しており、考え方の違いを実感。同じ大学なのにこんなに異なることが分かって、楽しかったです。

新しいことに興味が湧いた

危機管理学部 **齋藤 健太** さん

競技部に入っているためスポーツに関わる視点で意見を出しましたが、例えば芸術学部の学生は絵画や写真などを学び、全く異なる発想をしており、面白いと感じました。

模造紙に貼られた付箋を見ても、自分一人では思い付かない多種多様な意見やアイデアが出ており、これまで関心がなかった新しいことに興味が湧きました。

こうした機会がなければなかなか会うこともない、他学部の学生と話ができて刺激を受け、とても有意義な一日でした。

新理事長に関氏


本学の新たな体制が始動した（7月3日撮影）

林真理子理事長の任期満了に伴う後任の理事長に、理事長推薦委員会が推挙した関泰一郎氏の就任が6月24日の理事会で決まった。

同日付で就任し、任期は令和12年度の定時評議員会終結時までの約4年間。これに伴い、関氏は生物資源科学部長を同日付で退いた。

理事会が昨年7月に策定した「求められる理事長像」に基づき、外部有識者ら7人で構成する理事長推薦委員会が人選を進めてきた。

関氏の推薦理由として「現場の痛みを理解しながらも、未来のために必要なメスを入れることができるリーダー」である点などを挙げている。

また、同日の理事会で副理事長に淺井万富業務執行理事の就任も決まり、同日就任した。

関　泰一郎（せき・たいいちろう）

昭和59年本学農獣医学部卒、61年本学大学院農学研究科農芸化学専攻博士前期課程修了。平成4年博士（農学）。23年生物資源科学部教授。令和6年同学部長。64歳。

大貫学長が再任

4月3日の理事会で大貫進一郎学長の再任が決まった。

6月24日付で就任し、任期は令和12年度の定時評議員会終結時までの約4年間。

学長の選出方法は立候補制。大貫氏一人の立候補となり、学長候補者推薦委員会での所信表明を踏まえた信任投票で、過半数の票を得たことから候補者になっていた。学長候補者選出会議での選出を経て、理事会で承認された。

また、7月3日の理事会で学長の代理・代行者に兼板佳孝副学長が選任された。

大貫　進一郎（おおぬき・しんいちろう）

平成3年本学理工学部卒。12年本学大学院理工学研究科博士後期課程修了、博士（工学）。27年理工学部教授、令和4年副学長、6年から現職。58歳。

業務執行理事・理事決まる

6月24日と7月3日の理事会で8人の業務執行理事が決まった。大貫進一郎学長を除く7人は以下の通り。

兼板佳孝（副学長 学務、情報イノベーション担当）、北田典子（副学長 学生、競技スポーツ担当）、坂本力也（副学長 研究、国際化推進担当）、山本剛史（総務、コンプライアンス担当）、淺井万富（財務、管財、付属病院、内部統制担当）、大熊智之（人事、広報担当）、伊藤ゆみ子（企画、改善改革推進担当）

〈理　事〉

7月3日現在（敬称略）

▽理事長推薦委員会からの推薦　関泰一郎

▽学長　大貫進一郎

▽副学長　兼板佳孝、北田典子、坂本力也

▽理事長からの推薦　大熊智之、山本剛史

▽教員のうちから選出　川上央、榛葉繁紀、轟朝幸、長谷川勉

▽職員のうちから選出　飯塚和一郎、友近英展

▽付属校教職員のうちから選出　中園健二

▽校友のうちから選出　今泉祐子、上條由美

▽学識経験者のうちから選出　淺井万富、伊藤ゆみ子、髙祖敏明、島本武彦、武内清信、束村博子、平沢郁子

常勤監事に2氏が就任

山本寛監事、小林清監事の任期満了に伴う新たな監事に、元生産工学部教授の廣田直行氏、元財務部長の福井正人氏が5月27日の臨時評議員会で選任され、6月24日付でそれぞれ常勤監事に就任した。

任期は令和12年度の定時評議員会終結時までの約4年間。

理事長あいさつ

学生の夢に寄り添い、共に創る未来

理事長　関　泰一郎



このたび、学校法人日本大学理事長に就任いたしました関泰一郎でございます。

本学は、130年におよぶ伝統と多様な学問領域を誇る我が国屈指の総合大学として、無限の可能性を秘めた多くの学生たちを育み、これまでに約130万人の卒業生を社会へ送り出してまいりました。

大切なお子さまを本学へ送り出してくださっている保護者の皆さまに、改めて深く感謝申し上げます。

私どもは、学生一人一人が輝き、誇りを持って成長できる未来志向の大学を目指しております。社会が大きな変化を迎える現在、自ら学び、自ら考え、自ら道をひらく「自主創造」の精神を重んじ、多様な知が融合する本学の特徴を生かした魅力的で質の高い教育・研究環境をさらに進化させてまいります。

キャンパスの主役である学生たちが、安心して学業に専念し、自らの夢や目標に向かって挑戦できるよう、強力な「学生ファースト」の支援体制を大貫学長とともに築いていく所存です。総合大学としてのスケールメリットと細やかなサポートを融合させ、未来へ羽ばたく力を学生一人一人に培ってまいります。

保護者の皆さまには「日本大学を選んで本当によかった」と確信していただけるよう、教職員一丸となって活気と希望に満ちた魅力あふれる大学づくりにまい進いたします。

これからも変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

学長あいさつ

時代を担う「H型人材」育成目指して

学長　大貫　進一郎



日頃より日本大学の教育活動に温かいご理解と多大なるご支援を賜り、心より御礼申し上げます。このたび、学長に再任いたしました大貫進一郎でございます。

1期目の2年間は、最優先課題である信頼回復に全力を注ぎ、不断の改革に取り組んでまいりました。その結果、「認証評価（大学評価）」における適格認定、「私立大学等経常費補助金」の段階的回復などの初期目標を達成できました。6月末より始まりました2期目は、未来への躍進という次なるフェーズへ力強く歩みを進めております。

本学は、135年を超える伝統の中で「自主創造」の教育理念を堅持してまいりました。AIが急激に進化するこの時代だからこそ、深い専門性と多角的な視野を持ち、多様な人と協働できる人材が求められます。総合大学としての多様性を生かし、分野を越えて協働しながら新たな価値を創出する「H型人材」の育成に努めてまいります。また、そのために必要な教学DXを強力に推進し、データ駆動型教育で学生一人一人の個性と成長を細やかにサポートしてまいります。

本学で学んだ大切なお子さまが、卒業後には創造性を発揮して社会を支え、世界で活躍できるよう、教職員一同、丁寧に寄り添ってまいります。そして、全てのステークホルダーの皆さまが「日本大学に関わることを心から誇りに思える明日」を全力で創り上げてまいります。今後とも、本学への変わらぬご支援とご協力を重ねてお願い申し上げます。

付属校ニュース①

日本大学高

小学生と英語交流

7月14日、本校に隣接している横浜市立箕輪小学校の6年生とSGクラス高校1、2年生が外国語交流会を行った。このプログラムは、小学校の英語教育の一環として、交流を通して英語に親しみながら積極的に関わり合い、伝え合う楽しさを体験することが目的。当日は英語でサイコロトークやなんでもバスケット、探偵ゲームなどを行う中で、小学生に英語を教えながら、交流を楽しんだ。



櫻丘高

陸上で全国大会出場

陸上部の熊谷采香さん（3年）が、7月に滋賀県で行われた全国高等学校総合体育大会の女子400㍍に出場した。

足首の捻挫やアキレス腱の負傷といったけがに泣かされながらも、たゆまぬ練習で得意のスタート技術を磨いた。また腰を乗せるという課題を克服し、念願だった全国大会の舞台で快走を見せた。次の大きな目標をインカレ出場に置き換え、今日も練習に励む。



鶴ケ丘高

OCC始動！

今年度、1～3年生約150人の有志によるオープンキャンパスクルー（OCC）が始動した。OCCは「鶴高の良さを伝えたい」「中学生の背中を押したい」と集まった生徒たちである。

夏休みのキャンパスツアーでは、学校生活の紹介や校内案内、質問対応などに大活躍で、来校者からも好評。本校の一番の魅力は、生徒たち。その魅力を生徒自身が伝えるOCCは、本校の新しい文化になりつつある。



藤沢中・高

鉄道研究部が東武鉄道賞



鉄道研究部が8月7日から9日に行われた鉄道模型コンテストにおいて「東武鉄道賞」を受賞した。今回製作したのは東武線浅草駅。テーマは「時を繋ぐ浅草」で、さまざまな時代における駅舎・町並み・地下街を再現したもの。全て手作りで6月から空いた時間で製作した。短い時間の中、部員は奮闘した。

豊山高

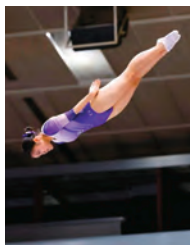
水泳部が全国制覇

8月13～16日に滋賀県で行われた全国高等学校総合体育大会で、水泳部が男子総合優勝を果たした。総合優勝は通算14回目。初めての総合優勝は昭和38年で、以来63年間にわたり、高校水泳界の上位校として歴史を刻んでくることができたのも、本校水泳部に関わり、支えてくださった全ての皆さまのおかげである。



豊山女子高

トランポリンで快挙



7月31～8月2日に開催されたトランポリンの第51回全国高等学校競技選手権大会において、江上瑠奈さん（1年）が東京都代表として出場し、団体5位入賞に貢献した。

また、8月下旬に開催された第63回全日本競技選手権大会予選会を見事突破し、11月に秋田県大館市で開催される、国内上位65人が出場できる本戦への出場を決めた。

三島高

地域との連携を強化

本校は7月に、アスルクラロスポーツクラブとM's PLANNINGの2団体と、パートナーシップ協定を締結した。この協定は、スポーツを通じた地域振興や地域福祉の増進、子どもたちの健やかな成長を目指して連携・協力していくもの。今後は、部活動の専門性向上や教職員のDX推進をしながら、地域に開かれた学校づくりをさらに進め、多様な団体との連携も広げていく。



明誠高

水泳部国スポ代表に

水泳部の奈良運音さん（3年）、村永龍章さん（2年）、川端日陽さん（1年）が8月2日、今年度の大会成績に基づき第80回国民スポーツ大会の山梨県代表に選ばれた。競泳は9月11日から13日まで、青森県の新青森県総合運動公園マエダアリーナで開催された。代表に選ばれた3人の選手たちは本番、ベストなコンディションでレースができるよう練習を重ねて挑んだ。



私大初、英語教育で連携

ETS・IIBCと締結

本学は8月27日、日本大学会館で米国のETS（Educational Testing Service）およびIIBC（国際ビジネスコミュニケーション協会）と教育連携協力に関するMOU（基本合意書）を締結した。本学学生の英語力向上と教育改善などが目的で、ETSと国内の大学との教育連携は、東北大に続き2例目で、私立大学では初の事例となる。

ETSはTOEFLやTOEICを開発する米国の非営利テスト開発機関で、IIBCは国内でTOEIC事業を実施・運営する機関。調印式には、大貫進一郎学長、ETSのアミット・セバクCEO、IIBCの藤沢裕厚理事長らが出席し、三者でMOUに署名を行った＝写真。



本書には、本学学生の英語力向上のためにTOEICなどETSが提供するテストプログラムを活用すること、ETSとIIBCが持つ分析・研究の知見を本学の教育改善に生かすことなどが盛り込まれた。

また、三者は取り組み成果の共有・発信を通じ、日本の英語教育の発展への貢献を目指す。今後、具体的な協力内容や実施方法などは、協議を通じて準備が整ったものから進めていく。

二つの海外研修を公式認定

日豪友好50年記念事業



日豪友好50周年のロゴ

オーストラリアのニューカッスルキャンパスを拠点に行われる本学の二つの海外研修が、在オーストラリア日本国大使館が推進する「日豪友好協力基本条約署名50周年」の公式記念事業に認定された。

公式認定されたのは、本部国際化推進室が所管する短期研修「ニューカッスルグローバル研修」と、生物資源科学部の「オーストラリア研修旅行」。

両研修は本学が所有し、オーストラリアのニューカッスル大と共同運営しているニューカッスルキャンパスを拠点に実施する。語学などの研修のほかにも、現地の学生や地域住民との交流を行い、国際的な視野を広げるとともに、異文化コミュニケーション能力を高めることを目的にしている。

ニューカッスルグローバル研修は、令和6年から約3～4週間の日程で年2回（8～9月、3月）実施。今年が1回目となる生物資源科学部のオーストラリア研修は9月13～20日の日程で行われた。

今回の公式認定は、本学の海外研修が日本とオーストラリアの相互理解と交流に貢献する重要な取り組みであることを示すものといえそうだ。

校友会

令和8年度役員総会

新会長に林真理子氏



令和8年度日本大学校友会役員総会が7月10日、東京都文京区の東京ドームホテルで行われ、8年度補助費の交付や7年度事業など4件の報告と、7年度収支決算、8年度事業計画案、会長と監事の選任など議事6件が満場一致で承認された＝写真。

総会には全国の都道府県支部、学部別・職域別部会、桜門会役員の208人（議決権行使および委任状による出席者118人を含む）が出席。冒頭、この日で任期満了となる大谷喜一会長が「3年間走り続けてこられたのは、役員ならびに事務局の皆さまのおかげ」と感謝の言葉を述べた。

議事では、準会員制度廃止に伴う新制度に関する件について、10年度から導入される新会費による財政シミュレーションを提示。若年層校友とのさらなる継続的関係構築を目指すとした。

会長に前理事長の林真理子氏（昭和51年芸術学部卒）が推薦され、選任された。同氏は本学のガバナンス改革に尽力するなど知名度と求心力があり、大学と校友会の連携を進める上でも適任とした。

林新会長は「大谷前会長の志を受け継ぎ、次代にふさわしい校友会にしていきたい」とあいさつした。任期は令和11年の定期役員総会まで。閉会後は懇親会が行われ、関泰一郎理事長と大貫進一郎学長も出席し役員との交流を深めた。

カザルスホール

整備の基本方針

千代田区と策定

本学と千代田区は、本学が所有する室内楽専用ホール「日本大学カザルスホール」の再生に向け、このほど施設整備等に関する基本方針を共同で策定した。

両者は令和7年から協議を重ね、本学が同ホールを貸与し、公共の施設として区が運営する方向性を確認した。

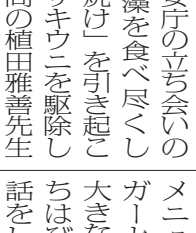
基本方針では、条例上の名称を「千代田区立神田駿河台ホール（仮称）」、通称名を「日本大学カザルスホールちよだ」とし、再開に向けた施設の整備・改修は所有者である本学が担当するとした。契約期間は20年。

今後は今年9月に基本構想を策定し、12月に基本協定を締結する予定としている。

同ホールは平成22年以降、音楽ホールとしての使用を休止していたが、地域から再開を望む声が上がっていた。

商学部

長谷川学部長が再任



7月3日開催の理事会で、長谷川勉教授の商学部長再任が決まった。8月1日付。学部長選出規程第23条に定める学部長候補者選出会議が5月から6月にかけて参考投票と面談等を行い、長谷川教授を商学部長候補者として選出。理事会の議を経て決定された。

長谷川 勉（はせがわ・つとむ）教授 平成6年3月本学大学院商学研究科博士後期課程単位修得満期退学。平成24年商学部教授。

生物資源科学部

磯部教授が学部長代行

関泰一郎生物資源科学部長の理事長就任に伴い、同学部の磯部勝孝教授が同学部長代行に任命された。大学院生物資源科学研究科長代行、大学院獣医学研究科長代行も務める。6月24日付。

付属校ニュース②

山形高

伝統胸に堂々演奏

吹奏楽部が9月に秋田県で行われた東北吹奏楽コンクールに出場し、2年連続の金賞を受賞した。3年連続30回目の出場となった今回は、県内トップレベルの演奏力を遺憾なく発揮。東日本大会出場こそ逃したものの、大舞台で圧巻のサウンドを豊かな表現力で響かせ、日頃の努力の成果を存分に示した。



東北高

郡山JC歌舞伎出演

6月20日にホテルハマツで開催された郡山青年会議所創立65周年記念式典・祝賀会のアトラクション「JC歌舞伎」に、本校生徒5人が出演した。郡山市を代表する伝統芸能「柳橋歌舞伎」にもつながる地域文化に触れ、「助六由縁江戸桜」では口上と躍動感ある演技、「白浪五人男」では捕手役として傘を回すパフォーマンスを披露。数カ月の練習の成果に、会場から大きな拍手が送られた。



藤沢小

初の幼児向け夏祭り

本校は初となる、幼児対象の夏祭りを7月に実施した。5年生たちが企画・運営に携わり、ヨーヨーや金魚すくいなど、幼児が楽しめる出し物をタブレットを使って調べ、企画書を書き上げ校長先生にプレゼンをするなど、準備を進めた。

当日は来場者の誘導も担当し、高学年らしい振る舞いを見せた。参加者たちは、大いに楽しみ、幼児の笑顔が輝く一日となった。



幼稚園

夏のプール保育

6月下旬から7月の終業式までの約1カ月間、夏恒例のプール保育を実施した。夏空の下、心地よい水の感触を楽しみながら全身を使って遊び、心身の調和的な発達を促す活動となった。

今年も5人の日大生がサポートに加わり、プール以外でも、雨天時の運動や保育室での遊びの時間などで、園児と交流を重ねた。こうした特別な活動や新たな出会いを通じて、子どもたち一人一人の成長が感じられる充実した1学期となった。



認定こども園

七夕に願いを込めて

7月2日、恒例の七夕のイベントに備え、園児がエントランスや室内の飾りつけを行った。使用したのは薬学部の薬用植物園から贈られた竹。さまざまな願いを書いた短冊や、色とりどりの手作りの飾りを天事に結び付けた。子どもたちは、竹が伐採される様子や薬用植物園に生えている珍しい植物の写真を見て、また、担任の先生からの竹とササの違いの説明を熱心に聞き入った。



日大一中・高

海洋環境を守る

7月12日に、神奈川県の逗子海岸で行われたボランティア活動に、一般の方と共に本校の釣り人同好会が参加した。現地漁業組合の許可を得て、海上保安庁の立ち会いの下、海藻を食べ尽くして「磯焼け」を引き起こすムラサキウニを駆除した。顧問の植田雅善先生は「趣味や競技で釣りを楽しむには、まず魚の住む海洋環境を守ることが不可欠だということを伝えたい」と話した。



千葉日大一中・高

ダンスで地域交流

ダンス部は8月1日、北志津児童センターで、近隣の小学生を対象とした「キッズダンス体験」を開催した。当日は15人の小学生が参加し、部員から振り付けを教わりながら一緒にダンスを楽しんだ。



ダンス部への参加だけでなく、近隣の幼稚園で公演を行うなど、地域貢献にも力を入れている。今後もダンスを通して地域との交流を深めていく。

千葉日大一小

笑顔あふれる共食

本校は年に2回、併設の中学校・高等学校の食堂で「お楽しみ共食」を実施している。異なる学年と会食することで交流を深めるとともに、地産地消や栄養、衛生などについて学ぶ食育の機会としている。今年度1回目のメニューは、チーズバーガーとフライドポテト。大きなバーガーに児童たちはびっくり。楽しく会話をしながら味わい、1年生も見事完食した。笑顔あふれる有意義な時間となった。



「お悩み」解決アプリを開発

N.教学イノベーション推進プロジェクト

学部や分野を超え学修意欲の高い学生が一つのテーマを議論する第3回「N.（エヌドット）教学イノベーション推進プロジェクト」が5月30日、11学部、大学院4研究科、通信教育部の学生44人が参加して日本大学会館で開催された。

今回のテーマは「大学生の〈お悩み〉を解決するアプリ開発」。午前10時、初対面同士が10組に分かれ議論を開始。各組はグーグルの「AI Studio」を活用、クラウドエース社の現役エンジニア8人がメンター（指南役）として支援態勢を敷いた。

これまでアプリ開発に縁がない学生も多くいたが、自発的にアイデアを


初対面のメンバーでアプリを作り上げる

AI（人工知能）にぶつけながらアプリの完成度を高めていく。

午後4時半、各組による5分間のプレゼンテーションが始まり、審査の結果、先輩の生きた情報を基に、受けたい授業の選択に使えるアプリ「履修じい」が1位に輝いた。

上位には留学生の生活を支援するもの、天候やTPOに応じて服装を提案するものなど「お悩み」をリアルに解決するアプリが選ばれた。

「履修じい」を作成した生産工学部の学生は「初めましてのメンバーながら、抜群のチームワークだった。アプリ開発未経験だが、AIを使って楽しく作ることができた」と手応えを口にした。

大貫進一郎学長は総評で「AI時代においても人と人とのつながりの中で新しい気付きがあったと思う。本日のイノベーションの体験を生かし、日本や世界で活躍していただきたい」と期待を述べた。

理工学部

超小型人工衛星「PRELUDE」打ち上げ

地震の先行現象を観測



理工学部航空宇宙工学科の山﨑政彦准教授の研究室などが開発した超小型人工衛星「PRELUDE（プレリュード）」（＝写真）を搭載したロケットが4月23日、ニュージーランド・マヒア半島から打ち上げられた。プレリュードはその後、ロケットから切り離され、軌道投入された。

プレリュードは、地震に先行して電離圏に生じる可能性のある微細な変動の観測を目指す人工衛星で、地震予知に役立つ先端研究として期待されている。大きさは100ミリメートル×226.3ミリメートル×366ミリメートルの6Uと呼ばれるサイズで、重さは9.8キログラム。

静岡県立大グローバル地域センターの鴨川仁特任教授を中心とする自然災害研究部門のメンバーと連携した理工学融合型の実践プロジェクト。宇宙航空研究開発機構（JAXA）の「革新的衛星技術実証4号機」の一機として打ち上げられた。

今後、プレリュードとの通信を確立した後、2年間にわたり地震と電離圏の関係解明につながるデータの取得等に取り組む。山﨑准教授は「さらにブラッシュアップした2号機、3号機も開発し、複数の人工衛星による精度の高い観測に挑戦したい」と話している。

学生目線の化粧品開発

発売前に学長らに報告



薬学部と理工学部の女子学生が開発した化粧品「Le Caché（ル・カシェ）」が7月に発売されるのを前に、代表の薬学部4年の山田怜奈さんと、副代表の理工学部4年の白井芙佳さんが6月12日、日本大学会館を訪れ、林真理子理事長、大貫進一郎学長に完成品を進呈した＝写真。

「ル・カシェ」は、日大生のやってみたいを実現する「自主創造プロジェクト」に採択され生まれた化粧品。両学部の学合成や調合技術を、それぞれが担当した。

「ル・カシェ」は当面は学内の購買部で販売し、需要をみながら販路を広げていく予定だ。

42人の学生が1年間かけて取り組んだ。

コンセプトは「ゴミが出ず、自習室でも周囲を気にせずに使え、勉強中の眠気覚ましや気分転換ができるロールオン化粧品」。薬学部の学生が成分の安全性や効能評価を、理工学部の学生が化

自主創造プロ採択

モデルロケットなど27件

日大生のやってみたいを実現するプロジェクト「令和8年度日本大学自主創造プロジェクト」に35件の応募があり、このほど新規15件、継続12件の計27件が採択された。

新規企画として、紙や木で作る「モデルロケットで地域を元気にしよう！」（代表者・大学院工学研究科の神谷航生さん、補助額30万円）、視覚を必要としない新たな芸術表現を模索する「振動は表現になるか？」（代表者・芸術学部の本間桜楽さん、同）などが選ばれた。

自主創造プロジェクトは、学部間交流を通じて学修を深化させることを目的に「学生の自由な発案」を支援するもので、今回で6回目。2学部以上かつ5人以上の学生が参加していることなどの応募条件がある。

採択されたプロジェクトは、活動期間中の進捗状況報告のほか、活動期間終了後は報告書提出、活動報告を行い、優れた成果を上げたプロジェクトは大学から表彰される。

11月23日に開催

オープンユニバーシティ

受験生や保護者を対象に本学の全学部全学科（16学部86学科）、通信教育部、短期大学部の教員と学生が学びの特徴や魅力を発信する「日本大学オープンユニバーシティ」が、11月23日に東京・ベルサール高田馬場で開かれる。昨年に続き2回目で、参加は無料。特設サイトでは、10月から来場登録（事前申込制）ができるほか、当日のタイムスケジュールが確認できる。

付属校ニュース③

日大二中・高

予約枠は全て満席

夏休みに計6回の中学・高校説明会を実施。日本大学志願者の人気回復もあって、予約枠は全て満席となる盛況ぶり。各回、中・高生徒会役員の協力で、生徒目線での本校の学校生活や魅力、受験時の過ごし方などについて、受験生・保護者に向け発信した。「生徒の素直な声が聴けて良かった」「学校生活への具体的なイメージが高まった」といった高い評価が多数寄せられた。



日大三中・高

相次ぎ全国優勝

放送部が8月18日に行われた第47回NHK杯全国中学生放送コンテストで、最優秀賞に輝いた。

中学男子テニス部は17日から行われた第53回全国中学生テニス選手権大会で、30年ぶりに団体優勝。30日から開催の全日本ジュニアテニス選手権では、高校2年の野田悠心さんがダブルスで優勝した。

他にも、全国で3位、5位というニュースもあり、多くの活躍があった。



大垣日大高

女子柔道が全国大会



全国高等学校総合体育大会柔道競技が8月6日から10日にかけて開催され、反中千陽さん（2年）が女子78キログラム超級に出場した。1回戦では神奈川県代表選手に一本勝ち、2回戦では沖縄県代表選手に有効で勝利。3回戦まで進出し、全国の強豪を相手に健闘した結果、見事ベスト16入りを果たした。

全国の舞台で得た貴重な経験を今後の練習や大会に生かし、さらなる活躍が期待される。

土浦日大高

合気道演武大会に出場

合気道部が8月7日に東京武道館で開催された第23回全国高等学校演武大会に出場した。

同部は稽古を通じて、自己鍛錬の姿勢や他者を尊重する姿勢を身に付けることで、精神的な成長を大切にしている。同大会では、日々の成果を示すような実直で素直な演武を行うことができた。



岩瀬日大高

全国高校総文祭に出場

「文化部のインターハイ」とも呼ばれる第49回全国高等学校総合文化祭（あきた総文2026）の新聞部門が、7月28日から秋田県潟上市で開催され、ソーシャルメディア部3年の深谷心美さんと宮田桃花さんが茨城県代表として出場した。

全国から集まった新聞部員と共にグループをつくり、秋田県内の水産業や教育・文化についての取材を行い、その成果として全員で協力してオリジナルの新聞を完成させた。



土浦日大中等

「みんなの夢」で受賞

8月20日に国立オリンピック記念青少年総合センターで行われた「みんなの夢AWARD7全国大会」に、本校5年生の佐野智武さんが出場し、グローバル・シチズンシップ賞を受賞した。

「OVERVIEW ACADEMY～地球を救うリーダーを宇宙から育てる～」という題で、これまでの起業ゼミでの研究成果をまとめ、堂々とプレゼンテーションを行った。



今後も研さんを重ね、キャリア実現に向けて努力に励む。

土浦日大高幼稚園

中学生が職場体験

7月28、29日の2日間、土浦市内の中学2年生5人が職場体験に来園した。

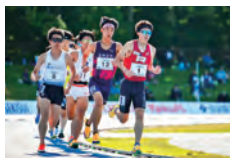
園児たちは、積極的に中学生の手を取り楽しそうに遊び、中学生たちは、積極的な園児に少し戸惑い気味の様子。徐々に笑顔も見られ、最終日は名残惜しそうな様子も見られた。中学生の中には卒園者が数人おり「広いと思っていた保育室が、とても狭く感じる」と、当時を懐かしんだ。

宮崎日大高

2種目で県高校新

7月に北海道で行われた陸上のホクレン・ディスタンスチャレンジに出場した藤井雄大さん（3年）が、男子1500メートルと同5000メートルの2種目で宮崎県高校記録を更新した。

4日に千歳市で行われた同1500メートルB組では3分42秒73を記録し、従来の県高校記録を6秒51縮め2位。さらに、8日に網走市で行われた同5000メートルC組では、13分47秒07をマークし3位に入り、再び県高校記録を塗り替えた。



校友会

次世代委員会発足

若年層の交流会始動

校友会は5月15日、40歳以下の本学関係者を対象にした交流会「第1回日本大学NEXT LOUNGE」を開催した＝写真。若手校友の活性化を狙いに昨年発足した「次世代委員会」が主催する初のイベントで、当日は30人（学生17人、卒業生13人）が参加し、盛況裏に終えた。今後も継続していく。



テーマは「Beyond the Border～多様な価値観が混ざり合う夜～」。参加者が自然に会話を楽しめるよう立食スタイルを取り入れ、20歳以上にはアルコールも提供した。

自己紹介の後、共通点のある人を求めて会場内を動き回るワークショップ型ゲームや、ホワイトボードを使ったフリートークを実施。アットホームな雰囲気の中、2時間半にわたって交流を深めた。

次世代委員会は、校友会の集まりが中高年層中心になっている現状に鑑み、若手同士の交流やつながりを促進する狙いから発足した。趣旨に賛同した19人の若手校友が、無償で活動している。

同委員会の西尾夢乃さん（生物資源科学部卒）は「今後も異なる学部や立場、世代がフラットに交流できる『居場所』を積極的に創出していきます」と話している。

軽井沢研修所の利用拡大へ

初の試泊会を開催



軽井沢研修所の利用拡大に向けた初の無料宿泊イベント「試泊会」が6月6、7日に1泊2日で開かれた。同研修所を利用したことのない学生と教職員に価値を認識してもらい、全学的な利用の呼び水にするのが狙い。ゼミ・サークル合宿や部科校行事の下見を目的に36人が参加した。

初日に主管部の学生部学生課職員による研修所内を巡る案内ツアーが行われ、ラウンジや食堂、大小さまざまな講義室、浴場などのほか、屋外のテニスコートやグラウンドをくまなく見て回った＝写真。

参加者からは、「予想していたより大きくてきれい」「この施設が十分に利用されていないのはもったいない」などの声が聞かれた。

今年で50周年を迎える同研修所は、新入職員研修や新入生オリエンテーションなどで多くの本学関係者が利用してきたが、コロナ禍以降は団体旅行文化の衰退なども重なり利用が低迷している。

UNIVASに加盟

本学は5月26日付で、大学スポーツの振興を目指す統括団体「大学スポーツ協会（UNIVAS）」への加盟が承認された。

同協会は全国の大学や競技団体が連携し、学生アスリートの学業両立支援や安全安心な競技環境の整備、大学スポーツの価値向上などを推進する組織。本学は今回の加盟を通じ、学生が安心して競技に取り組めるようさらなる改善改革に努めていく。

春の叙勲

本学関係13人受章

政府は4月29日付で令和8年春の叙勲受章者を発表した。本学関係者は旭日大綬章の佐藤勉氏（元総務大臣・内閣府特命担当大臣・国家公安委員会委員長、元総務副大臣、元衆議院憲法審査会会長、元衆議院国家基本政策・議院運営・総務各委員長、元厚生労働大臣政務官、元衆議院議員、工卒）ら13人。このほかの受章者は次の通り（中綬章以上）。

◇旭日中綬章　石坂真一氏（元真岡市長、文理）、大野実氏（元全国社会保険労務士会連合会会長、大学院生産工学研究科修士課程修了）、杉本潤氏（元日本ダイカスト協会会長、生産工卒）、筒井隆彌氏（愛知県議会議員、元評議員、法卒）、富野喜幸氏（アニメーション監督、文化功労者、芸術卒）

◇瑞宝中綬章　青木一能氏（名誉教授、元文理学部教授、元国際関係学部教授、慶應大大学院法学研究科）、清野宏氏（名誉博士、東京大名誉教授、松戸歯卒）、栗本まさ子氏（元内閣府食品安全委員会事務局長、元評議員、東京農工大農）、原直久氏（名誉教授、元芸術学部教授、芸術卒）、百地章氏（名誉教授、元法学部教授、京都大大学院法学研究科）、山本剛史氏（業務執行理事、元監事、元仙台高等裁判所判事〈部総括〉、東京大法）、山本洋氏（元陸上自衛隊中央即応集団司令官、大学院総合社会情報研究科修士課程修了）

法学部

ふるさと納税返礼品を提案

塩尻のおやきとワイン



法学部の学生グループが提案した長野県塩尻市のふるさと納税返礼品2品が事業化され、6月1日、ふるさとチョイスで提供が始まった。若者の発想を人口創出と産業発展につなげたい塩尻市が、法学部公共政策学科の授業と連携して「返礼品開発プロジェクト」を開始。学生と市内事業者が対話を重ね「からだ応援おやき」（＝写真）と赤ワインの「CAVE桔梗桔梗の里」が誕生した。

おやきは体づくりと栄養補給の観点からプロテイン活用を学生が発案。エンドウ豆パウダーを配合した味の異なる「マイタケ」「シメジ」「エリンギ」の9個セットで寄付金額は1万35００円から。ワインは塩尻特産コンコード種を使用。市花である桔梗をモチーフにAI（人工知能）を駆使してラベルを考案した。同1万100０円から。

おやき開発に携わった鳥越りおさん（4年）は「若い人に親しみを持ってもらえるようサッカーとバスケットボールの焼き印を提案しました。採用されてうれしい」と振り返った。

指導に当たった林紀行教授は「授業での提案が事業化されるのは初。現在は岡山県美咲町に挑戦しています」と話している。

「学長がいく!」撮影開始

付属校の魅力を発信



動画「学長がいく！」の付属校シリーズの撮影が6月に始まった。

同作は、大貫進一郎学長が学部のキャンパス等に足を運び、学生の活動や教員の研究、施設等を紹介するもので、令和7年1月から公開している。

今年度は大貫学長が付属校を中心に訪れ、生徒の活動や施設の紹介、校長対談等を通じて、各校の特色や魅力を学内外に広く発信する。第1弾として日本大学高校・中学校の撮影を終え（＝写真）、順次、他校にも撮影に訪れる予定。

付属校ニュース④

佐野日大高
29年ぶりベスト16



硬式野球部が第108回全国高等学校野球選手権大会に出場し、16年ぶりに聖隷クリストファー高（静岡）に1対0。2回戦の神村学園高（鹿児島）に3対1で勝利するなど、好投手擁する相手チームにも粘り強い野球で、見事29年ぶりにベスト16という成績を収めた。春の選抜大会で歌えなかった校歌を歌うという目標を達成し、充実した夏となった。

佐野日大中等
平和の鐘を鳴らす



8月4日、佐野ユネスコ協会主催の「平和の民話語り」「平和の鐘を鳴らす運動」イベントに4年生の飯田実桜さんと三上彩花さんが参加した。今年度は、日本のユネスコ加盟75周年・ユネスコ憲章制定80周年の節目の年。戦争体験に基づく民話に耳を傾けた後、一人一人が平和への願いを込めて鐘を鳴らした。平和の大切さについて考える貴重な時間となった。

長崎日大高
甲子園で校歌を！

第108回全国高等学校野球選手権大会に、16年ぶりに出場（春・夏連続）した本校は、初戦で立正大淞南高（島根）と対戦。15対1で勝ち、今春に実現できなかった「勝って校歌斉唱を！」を達成した。2回戦は有明高（熊本）との九州勢対決。エース古賀友樹投手（3年）が粘投し、打線は9回に1点差に迫ったが、2対3で惜敗した。平成19年以来の甲子園「2勝」はならなかったが、試合後、スクールカラーに染まったアルプススタンドから、選手をたたえる拍手が送られた。



長野日大高
女子卓球部の快進撃

女子卓球部は強化を始めて3年目になる。今年の長野県高等学校総合体育大会では団体・シングルス・ダブルスで優勝し「3冠」を達成、団体種目での全国高等学校総合体育大会出場は初となった。同大会では団体でベスト16という結果を収め、本校の名を全国へとどろかせ、部員にとって実り多き充実した夏となった。さらに上位進出を目指し、感謝の気持ちを持ってさらなる高みを目指していく。



長野日大小
五感で学ぶ信州の自然

本校は6月18、19日、3年生にとって入学後初めての宿泊行事となる自然体験学習を、飯山市で行った。手すき和紙作りやブナの森散策、川遊び、農作業、笹ずし作りなど、飯山ならではの自然や文化を体験。五感を通して「なぜだろう」と問いを深め、自然と人々の暮らしとのつながりに気付く機会となった。地域の方との交流も含め、教室では得られない学びを深める2日間となった。



札幌日大高
3年連続予選突破



6月7日に行われた第46回全国高等学校クイズ選手権オンライン予選会において、クイズ研究部が北海道・東北ブロックを突破し、TOKYOラウンドへの出場を決めた。大山莉璃羽さん、大杉歩果さん、藤原言葉さん（いずれも3年）は、激戦を勝ち抜き、女子単独チームの代表権を獲得し、本校としては3年連続の出場を果たした。7月28日に行われたTOKYOラウンドでは惜しくも敗退となったが、発想力・判断力・団結力を発揮して、クイズの魅力を存分に味わった。

目黒日大高
ダンス部3大会制覇

ダンス部は、年間四つの主要大会に出場し、今年は「4大会全制覇」を目標に掲げた。4月のマイナビHIGH SCHOOL DANCE COMPETITION 2026 FINAL SMALL部門、8月のDCC決勝大会で優勝。さらに9月の日本高校ダンス部選手権（ダンススタジアム）全国決勝大会で、史上初となるスモール、ビッグ両部門優勝を達成した。仲間と積み重ねてきた経験と覚悟を力に変え、残る大会も頂点を目指し、6冠達成への挑戦を続ける。

目黒日大幼稚園
警察署と防犯訓練

9月4日、目黒警察署の協力の下、不審者侵入を想定した防犯訓練を行った。職員が対応に当たる間、園児は担任の話を聞き素早く行動することができた。

訓練後は警察署の方と「いかのおすし」の約束をした後、「交番ではどんな仕事をしていますか」と、園児が質問も。「みんなのヒーローだね」と園児は目を輝かせ、地域で働く方への興味や理解が深まる時間となった。

学生たちの活躍の場

日本大学には学生それぞれの興味に応じて選択できるゼミナールや研究室が多数あります。
本コーナーでは、学生たちの活動をピックアップします。

02　生物資源科学部 国際共生学科

地域マネジメント研究室



学生主体の課題解決型プロジェクトで地域資源の価値化と持続可能な発展を

地域マネジメント研究室のコンセプトは、産学連携による地域資源の価値化を通じ、地域の持続可能な発展に貢献すること。指導教員の小谷幸司教授は「地域振興に取り組むゼミは多々あるが、当研究室は農林水産物を主体に継続的に活動をするため、学生が卒業しても後輩に引き継がれることが特徴」と話す。民間のシンクタンクで食農分野の産地形成やブランディングに携わった同教授の実績が基盤。現在３、４年生22人が在籍し、自治体や農業生産者からの依頼による三つのプロジェクトが進行している。

千葉県と沖縄県で独自のプロジェクトを進める

研究室で10年続く「江戸前ちば海苔プロジェクト」は、学生８人が担当。千葉県産の養殖ノリは200年の歴史を誇るが、温暖化でクロダイが増加し捕食されるなど問題も発生。同県から依頼を受け、江戸前ちば海苔のリブランディングに挑んでいる。新商品を開発し、東京・青山のファーマーズマーケットへ定期出店。漁師や問屋、飲食店等と連携しノリの価値を広げるワークショップも行ってきた。リーダーの梁瀬朱音さん（４年）は「食べて『おいしい』と言われるとうれしい。やりがいがあります」と笑う。

二つ目は、学生７人で取り組む「やんばるSPICEプロジェクト」。沖縄本島北部のやんばる地域で国産スパイス作りに取り組む農家と提携し、沖縄で年2回、東京で年4回程度、飲食店や企業と連携してオリジナルレシピを使った料理教室やスパイス講座などを実施している。「ＳＮＳを使って少しでも認知度を高めたい」と工夫を凝らすリーダーの西尾輪花さん（同）。同プロジェクトは今年で６年になる。


マルシェで販売を担当する学生たち

三つ目は、昨年から始まった「上総プロジェクト」。江戸前ちば海苔プロジェクトから発展し、千葉県上総地域のモノやコトの価値を再発見、発信する活動を行っている。学生７人が担当し、猟師や飲食店と連携しジビエをテーマとしたイベントを展開中だ。

実社会で即戦力となる経験を積み、地域に貢献

各プロジェクトはリーダーと広報、企画、販売担当に分かれる。小谷教授は「実際の企業活動と同じ。自分より消費者や連携先の都合を優先する柔軟性が必要」と話す。「江戸前ちば海苔の消費者アンケート集計担当と同時に室長も務め、マネジメント力が付きました」というのは吉永愛さん（４年）。英語の得意な副室長の木原舞香さん（同）は「外国人のお客様にノリのおいしさを伝え、コミュニケーション能力が向上しました」と成長を実感している。

積み上げた実績は、農林水産省の「ディスカバー農山漁村の宝」をはじめ各種コンテストでの受賞につながり、多様な農林漁業関係者との連携の機会を広げてきた。「単にモノを売るだけでなく地域で関わる人や観光需要を促進するなど、関係人口を増やすことが大切」と同教授。学生の就職先は食品業界ほか金融、住宅メーカーなど多岐にわたる。「生産者に寄り添い、信頼関係を築いてきた経験は将来必ず役に立つはず」と期待をかける。

工学部 土木工学科　01

コンクリート工学研究室



老朽化した社会インフラに挑む現場知性のあるエンジニアを育成

日本では高度成長期に造られた道路やトンネル、橋梁（きょうりょう）の老朽化が深刻な事態になっている。コンクリート工学研究室は、長持ちする道路橋を実現するため、車が走行するコンクリート版（ＲＣ床版）の補修の実験や、火害に強いコンクリート構造物を実現するための実験など、現実に直結する「実学的研究」を行っている。指導教員である工学部土木工学科の子田康弘教授は「料理と同じで、素材が良くても現場対応が悪ければ真価は発揮できません。求められるのは、現場で課題発見でき、決断できる人材。工学部では『現場知性のあるエンジニア』と呼んでいます」と話す。

段取りを考え、実験通じて成長実感

コンクリート工学研究室には、４年生10人、大学院１年生２人、同２年生１人が在籍している。研究室での学びは、ほぼ実験だ。主な研究の一つは、高速道路のコンクリートの劣化と補修方法。約60㌢㍍四方のコンクリート版に、表面がはがれて骨材（小石や砂）が露出した状態を再現し、疲労試験機で１万～２万回も荷重をかけて、破壊する様子を観察・計測する。別の研究では、一辺約10㌢㍍のコンクリートの立方体を600度で加熱・冷却を繰り返し、加熱による破損状態を調べ高い耐火性を有するコンクリートを開発する。


道路橋の耐疲労を評価する実験

「在学中にできることは限られています。卒業論文を仕上げることはもちろんですが、実験を通じて安全を確かめ、段取りを考え、協力して取り組む力を身に付けてほしい。予想と異なる結果が出たときも、その理由を考え、次の行動を判断できる技術者を育てたい」と子田教授。実際、４年生の髙橋颯太郎さんは「実験を繰り返すうちに段取りを考えられるようになり、自信が付きました」と話す。「発表の機会をたくさんいただき、プレゼンテーションの苦手意識がなくなりました」というのは細川聖弥さん（大学院２年）。学生はそれぞれの視点で実験に臨み、成長を感じている。

地域と環境の問題に取り組む竹筋コンクリート

現場重視の実験研究に加え、近年は放置竹林の竹を活用する「竹筋コンクリート復活プロジェクト」にも取り組んでいる。竹筋コンクリートは、鉄筋の代わりに竹を補強材として用いる技術だ。過去に使われた技術を現代の科学技術で見直し、用途に応じた活用を目指している。鉄筋の使用量を減らすことで、二酸化炭素排出量の削減が期待されるほか、竹の有効利用を通じて竹林の適切な管理にもつながる。強度や耐久性を検証しながら、まずは水路などに使うＵ字溝への活用を進めている。

卒業生の就職先は民間企業が多い。髙橋さんはコンクリート系企業に就職を決めた。中島涼介さん（大学院１年）は、今は研究に専念しようと考えている。子田教授は「実験で培う段取りや判断力、研究成果を人に伝える力。地域の課題に向き合う研究を通じて、学生たちは社会インフラを支える技術者としての力を育んでいます」と話した。

INTERVIEW　保護者に役立つミニ講義

富士山噴火にどう備えるか

山頂噴火の研究に新たな光 最悪の事態を想定した対策に貢献

約300年前の宝永噴火から噴火がなく、いつ噴火してもおかしくないといわれる富士山。甚大化する自然災害の一つとして、国も対策を打ち出した。富士山噴火の研究はどこまで進んでいるのか、文理学部地球科学科の金丸龍夫准教授に聞いた。

地磁気を使った研究で年代を推定

富士山などの火山に関する研究は、それがどのようにできたのか、また、いつ噴火してきたのか、という二つの視点が大事です。

火山は地震発生のメカニズムと基本的に同じ仕組みでつくられます。地球の表層にあるプレートが沈み込み、マントルの一部を溶かしてマグマを生み、それが上昇してマグマだまりをつくり、その一部が地表に噴出して火山となります。富士山は日本列島周辺にある太平洋プレートがフィリピン海プレートに沈み込むことで形成される、伊豆ー小笠原の巨大な火山列の北端部にあります。

富士山の噴火に関する最新の研究により、山頂噴火は約1200年前である可能性がでてきました。私は岩石学の専門家として山頂の岩石（溶岩）を採取し、古地磁気という手法で年代を推定する研究を行っています。

簡単に言うと方位磁石の示す北は年により真北からわずかにずれており、常に変動しています。採取した岩石（溶岩）も磁気を帯びており、その真北からのずれを測定すると、岩石ができた、つまり噴火した年を知ることができるのです。

首都圏の降灰を想定した備え

近年、気候変動による自然災害の甚大化が社会問題になっています。平成26年の御岳山の噴火以降、富士山についても、災害対策の研究に重点が置かれるようになりました。

火山は一般的に噴出物の量を縦軸、噴火した年を横軸にグラフ化すると階段状になり（階段図）、火山固有の噴火の周期や規模の推測に役立ちます。富士山は約300年前の宝永噴火以外に数多くの噴火を起こしていますが、階段図の完成までは道半ばです。研究中の山頂噴火の時期が分かれば、今後の対策にも大きく貢献するでしょう。

富士山頂が噴火すれば偏西風に乗った火山灰が首都圏にも飛散し、甚大な被害をもたらします。最新の研究に基づき、内閣府は令和7年3月に「首都圏における広域降灰対策ガイドライン」を発表しました。東京都市部にも10ｾﾝﾁほどの降灰を想定し、避難対応等の概要を示しています。首都圏の機能がまひすれば、たとえ降灰がない地域でも影響を受けるでしょう。地震、水害だけでなく、富士山噴火にも備えが必要です。



文理学部地球科学科 **金丸 龍夫** 准教授

かなまる・たつお

平成11年茨城大理学部卒。17年神戸大大学院自然科学研究科地球環境科学専攻博士後期課程修了。博士（理学）。19年本学文理学部助手、22年助教を経て31年より現職。23年第53次南極地域観測隊に参加。

円安はなぜ続くのか

主要因は日本と欧米の金利差 今後も続くと考えて生活防衛を

日々のニュースでは円安が大きく扱われている。複雑化する経済環境の下、円安がなぜ進むのか。企業への影響や消費者の取るべき対策について、商学部商業学科の松原聖教授に聞いた。

コロナ禍以降、急激に進行

円安という言葉は、日本円と他国通貨の相対的な価値（為替レート）を表すもので、円安ドル高という方が正確で分かりやすいでしょう。

現在、円安が続いている理由は二つ挙げられます。一つ目は日本と欧米、特に米国との金利差。二つ目は外国と比べた日本の成長力の差です。

一つ目の金利差は、コロナ禍収束直後に大きく拡大しました。令和４年、世界的なインフレ対策としてアメリカは政策金利を5.5%まで引き上げましたが、日本は異次元の金融緩和政策によるマイナス0.1%を継続。この金利差によってドルの価値が上昇し、為替レートは1ドル110円から132円まで一気に円安が進みました。日本は令和６年にマイナス金利を解除し、今年９月現在で1.25%程度になっていますがその差は依然として大きく、為替レートは150円台が続いています。

二つ目の成長力について、日本経済は昭和60年代のバブル崩壊以降、低成長が続いています。半導体関連産業など一部好調な企業もありますが日本経済全体としては投資対象としての魅力は低く、円の価値を下げる＝円安の要因となっています。

円安、物価上昇を想定した資産運用を

ある調査会社は、今年6月時点での企業の望む為替レートの平均値は1ドル138円80銭と報告しています。また為替レートは長期的には二国の物価水準の違いを反映するという購買力平価の考え方では107円34銭という説も。つまり円は過小評価されているという見方もありますが、世界情勢から見て円安はまだ続くと考えられます。

円安は輸出型企業の収益を増大させるメリットがある一方、海外雇用、海外生産が一般化しているため、効果は小さくなっています。限定的にはインバウンドの増大が地方の観光地に恩恵をもたらすことはあるでしょう。デメリットは、原油価格に代表される輸入原価の増大による物価上昇が大きく、海外旅行や留学がしづらい状況も続きます。

円安、物価上昇傾向の中、消費者としては、リスク分散型の資産運用が重要になるでしょう。今後、米国の中間選挙、ウクライナ情勢、中東情勢と各国の金融政策に注意する必要があります。

厳しさが続く日本経済ですが、若い世代が勇気を持って新事業に挑める環境をつくることも教員の使命の一つと考え、授業に臨んでいます。



商学部商業学科 **松原 聖** 教授

まつばら・きよし

平成4年一橋大経済学部卒。12年米国オハイオ州立大大学院経済学研究科博士課程修了。博士（経済学）。13年名古屋市立大経済学部専任講師、同助教授を経て19年本学商学部准教授、28年より現職。

日本大学をもっと知る 探Q

薬学部薬用植物園について知りたい



薬用植物園の詳細はこちらへ

本学薬学部にある薬用植物園は、学生の教育、研究の場としてだけでなく、地域社会に貢献する役割も担っています。薬学部薬用植物園の取り組みについて紹介します。

A1 薬用植物園の概要

約1000種類の植物を栽培する関東でも有数の規模

薬学部薬用植物園は、広さ約12000平方㍍（テニスコート約20面）で、国内外の薬用植物約1000種を栽植しています。関東にある大学の薬用植物園として有数の規模となっています。

標本園は医薬用植物区、和漢薬植物区、民間薬植物区、染料香料植物区に区分され、通路は座って観察ができる芝生貼り。標本室を備えた管理棟や温室なども設置されています。

工学部薬学科開設の翌年、昭和28年に工学部津田沼校舎（現生産工学部）に設置され、40年に現在の理工学部船橋校舎に移転しました。63年に薬学部として独立後、平成22年に薬学部に移管されました。

A2 授業での活用

植物に触れることで学びがより深まる

薬学部の学生は、授業のある日であればいつでも自由に利用できます。授業では、１年次の必修科目「薬用植物学」の中に「薬用植物観察会」があり、園内の植物をスケッチして提出。これは各薬用植物の特徴を知り、観察眼を養うことにつながります。その後、２年次から３年次にかけて生薬の基礎を学び、４年次以降に学ぶ、生薬を原料とする漢方薬の理解が深まるように、カリキュラムが組まれています。そのため薬用植物園も生薬の基原植物と近縁種、間違えやすい植物などを観察することを念頭に植栽しています。

体験型学習にも取り組む



授業での観察だけでなく、薬用植物の苗作りから栽培、収穫、加工まで、生薬を作る過程を実際に行う体験型学習も進めています。昨年度は、漢方薬で使用頻度が最も高い甘草の基原の一種、ウラルカンゾウを栽培し、２月に収穫。掘り上げた根をその場で洗い、かんで甘さを実感したり、成分測定の実習に使ったりしました。そのほかにも、生産工学部の教職課程の学生が履修する植物標本製作実習も行うなど、さまざまな目的で利用されています。

A3 薬用植物園の社会貢献

薬草教室の定期開催や他機関と提携した研究開発

毎年５月と10月に一般の方々を対象とした講演会と薬用植物園ガイドの「薬草教室」を20年以上続けています。参加者は毎回100人ほどで、リピーターも増えています。さらに３年前からは毎月１回土曜日に一般公開日を設け、開花時期の違いに細かく対応できるようにしています。また、小学校の見学会も20年以上続いており、それをきっかけに薬学部に入学したという学生もいます。

そのほか、薬剤師を対象とした漢方薬・生薬認定薬剤師の資格取得のための植物園実習、近隣の薬剤師会が主催する見学会の受け入れや、他の研究機関と提携した栽培研究なども行っています。今後も地域の方々に来ていただける機会を増やし、広く社会に貢献できる薬用植物園であることを目指しています。



ミシマサイコ
根を薬用とする。生薬名は柴胡（サイコ）といい、小柴胡湯など柴胡剤の主薬となる（夏～秋）



コガネバナ
薬用とする黄色い根が名前の由来。生薬名は黄言芩（オウゴン）で、多くの漢方薬に使われる（夏～秋）

ゴマ
夏に開花後、筒状の実を付け熟すと先端が割れて中のゴマを拡散。油は軟膏の基材にも（夏～秋）





熱帯植物を栽培する温室





今年５月に行われた薬草教室の様子

Comment



薬用植物園　園長

利用しやすい環境で優れた薬剤師を育成

薬学部薬学科 教授 **松﨑 桂一**

漢方薬など日本の伝統医学に用いられる生薬は、自然から生まれた多成分系の薬で、その作用が解明されていないものが数多くあります。そのため研究による新たな発見の可能性も大きいといえます。実際、数年前には、私が指導する生薬学研究室の大学院生が、葛根湯にも入っている麻黄（マオウ）からある種のがん細胞の増殖を抑制する成分を発見しました。

また、病気になる手前、未病の状態から体全体を整えて治すという考え方が、現代の健康志向や美容の観点からも注目されるようになり、漢方薬の需要はこれからも一層高まっていくと考えられます。

生薬製剤や漢方薬を扱う未来の薬剤師を一人でも多く育てるためにも、学生にとってより利用しやすい環境をつくっていくことが大切だと心掛けています。

漢方薬ミニ知識

二日酔いだけじゃない 体内の水分代謝を整える五苓散

五苓散（ゴレイサン）は、体内の水の流れを調節する代表的な漢方薬です。一般には二日酔いの薬として知られていますが、本来はむくみや口渇、尿量減少、頭痛、めまい、下痢など、基本的な体調を整える幅広い効能があることも覚えておくと役立つでしょう。